

(3)活動の成果

1)に関連した成果

介護保険制度において各保険者(市町村)は生活支援整備体制事業として取り組む必要があるため明らかになった住民ニーズは受け止める体制が整っている理由から関係者で共有することはできた。松本市の場合は、自治組織単位で町会や地区緩やかな協議体を中心に担っているため課題の把握は容易だが商品性開発に繋がりにくいことが分かった。その分、下諏訪町の場合は、町社協が事業主体になっているためネットワークを活用して商品性開発に繋がりがやすい比較検討ができた。松本市庄内地区でモデル的に「もずみ商店」(個人)が既に存在しており今期全市的な広がりを模索したがコロナ禍において進展は図られなかった。

2)に関連した成果

松本市白板地区放光寺町会のタクシーを活用した移動支援「お互いさまタクシー」は、2021年3月1ヶ月間と2021年4月～1年間の実証実験を基に2022年4月～本格稼働の計画を立てることができた。運用ガイドラインを作成、移動支援試行事業として全戸配布した。また住民向け説明会を2回開催した。これまでの民生委員との関わりの中から50人のニーズ対象を把握しており、当面この層へのアプローチから

積み重ねる戦略を立てることができた。商品性の観点から料金と利便性などの声を試行事業では主に拾う。アプリ開発であるエプソンエヴァシス(株)とのシニアとお仕事が出会うプラットフォームづくりは、参加者を増やすことは消費者を増やすことになるため敬遠されやすいアプリのツール開発に時間が割かれている現状がある。今年度は松本市中央地区、塩尻市シルバー人材センター、下諏訪町社協の3か所で聞き取りを行った。地元企業との接点が充分ではなく次期への課題である。先進地として富山県入善町と魚津市の視察を関係者が同行して行った。

(4)成果の公表(活動発表・論文執筆等)

下記の予定があったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となった

1. 2021年3月6日(土) 日本介護経営学会でのセミナーにて発表「生活支援サービス(介護保険制度)の商品性に関する可能性」→次年度へ
2. 東筑摩郡麻績村にて、コミュニティ商店(=地域運営法人)化構想の可能性を発表する計画
3. 2021年2月13日(土) 松本市高齢者支援講座にて発表

*その他、地区住民の勉強会、民生委員・社会福祉士の研修会での本取組を分析、紹介する予定であったがコロナ感染防止の理由で中止と延期になった。

5. 地域資源の発掘と活用を通じた地域づくりの推進

総合経営学部観光ホスピタリティ学科 畑井 治文

(1)活動の計画

1)課題意識

この地域連携活動の目的は、学生の参加に基づきながら、松本の田川地区・中央地区を対象として、「ひと」「もの」「こと」といった地域資源の発掘を行い、それらを活かしたまちづくりに取り組むものである。

これまで観光ホスピタリティ学科では、十数年にわたって田川地区および中央地区の地域づくりに取り組んできた。松本市田川地区では、松林邸のケヤキの保存活動に取り組み、ケヤキ祭りやけやきっ子ひろばなどを実施し、子どもたちと地域資源の発見・その意義の共有をしてきた。この松林邸のケヤキは渚の地盤の地固めや松本城の築城・改築を見越して

植えられた松本を語るうえで重要な地域資源であることが確認されており、そのような資源の再発見は、子どもたちの地域認識の捉えなおしにも大きく寄与できる。また、中心市街地にある松本電気館も大正から昭和初期の松本の町の変遷を今に残す、貴重な文化的資源である。そこで地域の中に埋もれた「ひと」「こと」「もの」を掘り起こし、地域の歴史的・文化的遺産の保存・活用をすすめる地域づくりをすすめてきたが、パンフレット・SNS(インスタグラム)などの媒体を活用したり、地域資源に関する調査を進めていったりすることを通して、住民主体の着地型観光の具体化にもつなげていければと考えている。

2)進め方

「地域資源を活かしたまちづくり」を進めていく上では、次のような諸点に取り組んでいくこととする。

- ①松本市田川地区渚のケヤキをめぐる歴史を掘り起こし、駅を中心とした西側の地区において着地型観光の地域資源として練り上げていく。
- ②上土商店街と連携して、松本市中央地区の歴史的資源(松商学園と上土とのかかわりなど)を掘り起こし、松本らしさを感じられる地域資源の発掘をこころみるとともに、地域の文化資源である松本電気館の保存・活用をすすめる。
- ③地域資源を活かした地域づくりの先進事例への視察研修を実施する。
- ④掘り起こされた地域の魅力を広くPRしていくために、チラシやパンフレットを作成する。

(2)活動内容・成果

2020年度はコロナの感染防止の観点から活動が制約されたが、田川地区ではケヤキを地域資源として活用した子どもを中心とした地域づくりの活動を行った。一方で、上土地区ではコロナの感染防止に対応した歴史的景観を活用した情報発信の活動を実施し、計画の変更はあったものの、当初の目的は達成した。それぞれの事業の詳細な内容は以下のとおりである。

1)田川地区におけるケヤキを地域資源として活用した地域づくり

①コロナ禍以前の取り組み

田川地区における取り組みは樹齢600年を超えるケヤキの古木を活用することで地域づくりを図っていくことを目的としている。かつては落ち葉が肥料として活用されたり、軟弱な地盤であった田川地区において災害を防ぐ役割をケヤキが果たしていたが、近年はむしろ落ち葉が近隣の住宅に被害をもたらすなど地域の深刻な課題となっていた。したがって、ケヤキに新しい地域における役割を与えることで地域課題を解決するとともに、その活動を通じて地域に新しい関係性を構築することが求められている。

本事業で、田川小学校や地区公民館などと連携して子どもたちとケヤキとの関係づくりを進め、その取り組みを通じて大人も巻き込みながら地域づくりのきっかけとしてケヤキを活かしていこうというものである。毎年、4月には近隣住民にケ

ヤキのもとで交流をしてもらう「ケヤキ祭り」、夏休みに近所の子どもたちを対象にしてケヤキの木陰で自然体験活動を行う「けやきっ子ひろば」、秋には田川小学校の総合学習の一環としての「落ち葉拾い」などを実施してきた。

②2020年度の取り組み

2020年度においては、「ケヤキ祭り」については、コロナ感染予防の観点から中止となり、8月7日から2日間の日程で予定した「けやきっ子ひろば」については、感染防止の観点から一旦中止となったが、本学学生のアイデアによって与えられた環境の中でSNS等を活用した形で実施することができた。

コロナの感染予防に配慮し、例年子どもたちを集めて行っていた「けやきっ子ひろば」を参加単位を家族として、「リモートけやきっ子ひろば」として、個別に松林邸を訪れ学生が事前に準備したクイズ形式のオリエンテーリングを行った。各参加家族とは遠隔にてコミュニケーションを図るとともに、開会式や説明会などについてはZoomのシステムを活用して実施した。

具体的な内容やスケジュールは以下のとおりである。

7月下旬 「リモートけやきっ子ひろば」についてのチラシを作成し、地区や田川小学校の児童に配布して参加者を募集。9家族11名(小学生8名・中学生3名)から参加申し込み

8月11日 開催に向けての資料等を参加者の保護者に送付・アプリのダウンロード等の準備を実施

8月15日 Zoomを利用したオンラインでの開講式と説明会の開催

8月16日～9月上旬 クイズラリー「自然体検隊入団テスト」の実施

松林邸の庭に隠してあるクイズを探し当て回答してもらう。

実施に当たっては事前に時間等を予約し各家族単位で行い、松林家で対応。

クイズは学生が考案したケヤキや地域の歴史などに関わる問題とする。

正解に応じて「初級」「中級」「上級」の段位を付与し認定書を授与。

木を使用した工作キットを自宅で組み立て木材の利用について理解を深める。

「リモートけやきっ子ひろば」については、参加者全員が所定のプログラムを修了し修了証書を全員に授与した。また11月には落ち葉拾いを予定通り実施し、田川小学校の児童の受け入れを含めて学生と地域住民によって取り組まれた。



リモート開講式・説明会(8月15日松林邸)



ケヤキの大きさを測る参加者



クイズに答える参加者

③事業の成果

2020年度は、対面で人が集まったの活動はできなかったものの、事業を実施するにあたり、参加した子どもたちや保護者と例年と比較して密にコミュニケーションを図った。したがって、例年はプログラムの当日のみの関係であったものが、1か月以上連絡を取り合うことでより参加者との関係性は深まった。

さらに例年は送り迎え程度でありあまり深く関わらなかった保護者がケヤキについて理解を深めることができ、秋に行われた落ち葉拾いに保護者が新たに参加するなど地域においてネットワークが拡がり、ケヤキに関する理解が深まったことは、当初予期しなかった大きな成果となった。

一方でケヤキを活かした着地型観光に関する取り組みや先進地の視察についてはコロナ禍において実施することができなかったものの、「リモートけやきっ子ひろば」をきっかけに新聞等にもとりあげられたこともあって地域住民のより広い関与が進んだ。特に秋に行われたケヤキの落ち葉拾いでは地区公民館の関係者や小学校の保護者などの新たな参加が進み、これまで学生が中心であった取り組みがより地域の主体的な取り組みに進化した。したがって、地域における理解の促進やケヤキの活用を通じた地域づくりという観点から初期の目的は達成できたと考えられる。

2) 上土町における歴史的景観を活用した情報発信

①コロナ禍以前の取り組み

上土地区においては、長年地域住民が主体となって取り組んできた地区の歴史や文化を活かした「大正ロマンのまちづくり」について、上土商店街と連携し、歴史的資源(松学学園と上土との関わりなど)の掘り起こし、地域の文化資源である松本電気館の保存・活用、その成果の発信などを行ってきた。特に2020年度は当初の計画では地区の歴史や文化などをSNSやパンフレット、マップなどを作成することで広く発信する予定であった。2019年度においてもそのために情報発信をテーマにした学習会を開催するなどの準備に行った。しかし2020年春からのコロナ禍によって活動は著しく制限されるとともに情報を発信する先として想定された観光客の来訪は難しく活動内容については再検討することとなった。

②2020年度の取り組み

コロナ禍を踏まえ活動内容を再検討した結果、2020年度は以下の取り組みを行うことで初期の目的を達成することとした。

i) 「agetsuchi_matsu」「上土Photo」

観光ホスピタリティ学科畑井ゼミの学生は、上土の景観を活用する方策として、街並みなどの写真を定期的に撮影し季節などにあわせてInstagramに掲載し情報発信を行った。コロナ禍においてできる活動を通じて上土の景観資源をまちづくりに活かすことが目的である。年間で約80回を超える投稿を行ったほか、投稿した写真を使ったポストカードの製作や写真集「上土Photo」を製作した。



Instagram「agetsuchi_matsu」の1ページ

ii) 白鳥写真館ディスプレイ

上土町にある旧白鳥写真館のショーケースを活用し、ディスプレイとして街の歴史や文化などについて情報発信を行った。「大正ロマンのまち」「ポストカードで川柳」「上土川柳第2弾～小学生の研究より～」など季節にあわせたテーマの下で展示を行った。特に川柳の募集や地元の小学生の研究発表の展示など地域と連携したディスプレイの展示を行った。

iii) ミニコミ誌「あやめ」合本

コロナ禍によって地域の中でのコミュニケーションがとりにくくなった現状を踏まえ、白戸ゼミの学生が取り組んだ地域の情報を発信するミニコミ誌「あやめ」をまとめ、地域の人材や文化などの資源について情報発信を行うことを目的として合本を製作した。

③事業の成果

コロナ禍においても可能な方法を考えて、地域の歴史的資源の掘り起こしについて様々なアプローチによって顕著な成果を遂げることができた。特に上土の歴史を反映した景観について写真によってその価値を地域内外に提起できたという点において「agetsuchi_matsu」「上土Photo」の果たした役割は大きいと評価できる。また「あやめ」においては、上土の歴史や文化を守ってきた地域の人々や店舗・施設などについて詳しい取材を行い、地元の住民も知らなかったような歴史的な事実等を掘り起こすことで、地域住民が自らの地域の歴史などの資源の価値に気づくきっかけとなった点で初期の目的は達成できたと考えられる。コロナ禍による活動の制約から当初予定していた松商学園と上土との関わりの掘り起こしや地域の文化資源である松本電気館の保存・活用については取り組みができなかったことから今後の課題となった。

また2020年度は当初の計画では地区の歴史や文化などをSNSやパンフレット、マップなどを作成することで広く発信する予定であったが、観光客などへの地域外への直接の発信は難しかったものの「agetsuchi_matsu」や「上土Photo」、「あやめ」合本などによって、多様な媒体を通じた情報発信を行うことができた。これらの取り組みについては新聞やネットのニュース等に何度も掲載されたことで地域に周知された。さらにそれらの成果品についてはコロナ禍の終息後の情報発信に資することが期待される。

(3) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)

Instagram「agetsuchi_matsu」

http://www.instagram.com/agetsuchi_matsu/?hl=ja
「上土Photo」

「2020年度あやめ」合本

上記の活動に関する取り組みの発表会

2021年2月26日「畑井ゼミ・白戸ゼミ卒業研究発表会」
上土ふれあいホール・カフェ「あげつち」(遠隔配信)